

79. 筑波大学における臓器移植研究

大塚雅昭, 深尾 立, 竹島 徹, 轟 健
石川詔雄, 折居和雄, 岩崎洋治 (筑波大)

筑波大学外科では, 1977年8月に死体腎移植を施行して以来本年までに, 生体腎移植25回, 死体腎移植11回が行なわれた。1年生着率は, 生体腎77.8%, 死体腎60.0%である。生体腎移植症例に対しては, シクロスポリンを併用した DST を行なっている。さらに最近行なっている臓器移植実験のうち, 全臓移植の尿液ドレナージュ法の研究と, デオキシスパガリンの腎移植拒絶反応に対する効果について述べた。

80. 北里大学における腎移植の現況 (XIII)

渡部浩二, 柏木 登 (北里大移植免疫)

62年12月までの生体腎191例, 死体腎53例の術後2年間の生着, 生存率をみると AZA, PRD 法や, AZA, MZ, PRD 法に比し CyA, MZ, PRD 法が生着率を高め, とくに死体腎移植成績を顕著に向上させている。生存率については両群とも CyA 導入により100%近い成績向上につながっている。死体腎移植の激減について, 体制上の問題から脳死をめぐる倫理委員会の問題などについて全国21施設の肝移植推進アンケート調査 (日本移植学会, 内田) の結果を報告した。

81. 噴門部胃肉腫に対する胃全摘 β 変法再建術

李 思元, 鍋谷欣市, 花岡建夫, 小野沢君夫
新井裕二, 本島悌司, 滝川弘志 (杏林大)

本映画は噴門部の悪性腫瘍に対する標準術式である胃全摘, 脾尾脾合併切除, 食道空腸 β 吻合術を供覧するものである。開腹後直ちに, 腫瘍細胞散布を防止すべく主要動静脈を仮結紮する。大網, 横行結腸間膜前葉を剝離し, 所属リンパ節を十分郭清し, 切除を行う。 β 吻合は食道空腸端側吻合後, 空腸輸入脚を食道左後壁, 横隔膜に吊り上げ固定する。同輸入脚での空腸瘻造設に際し, 大きく縫合し腸管を狭窄ぎみにするなどのポイントを強調した。

82. 急性胃粘膜病変と血液レオロジー

長町幸雄 (群馬大・一外)

日常の臨床で, 消化器病領域に占める上部消化管出血の割合は多い。しかし今日では大量の胃出血を特徴とする急性胃粘膜病変 (AGML) に対する first aid にはいきなり外科治療を選択することはなく, 保存治療で約80%の止血が期待できる。本講演では, AGML の発生成

因と最近の治療法に的を絞り, その理論的根拠や慢性消化性潰瘍との相違点を述べる。ことに AGML に関する最近の研究の中から血液レオロジーについての “topics” を紹介する。

83. 研究室発表

1) 肝細胞癌再発例の検討

山本 宏 (X線研究室)

1979年から1987年10月までに, 肉眼的に切除し得たと考えられる肝細胞癌95例を対象に残肝に再発を来す腫瘍側の要因, および再発例に対する治療について検討したので報告する。再発を来す腫瘍側の要因として, 門脈腫瘍栓, または肝内転移の存在が挙げられ, また再発に対する治療は再切除, TAE, エタノール局注等を適宜, 実施することが必要であり, そのことが, 肝細胞癌切除例の予後向上に大きく寄与するものと考えられる。

2) PTP による Hepatogram の分類

元山逸功 (生理研究室)

悪性疾患合併を除外した LC 33例, IPH 10例の計43例の術前 PTP を検索し, その Hepatogram を4群に分類した。Type Aは肝内門脈5次分枝以上, Type B₁は四次分枝まで, Type B₂は3次分枝まで, Type Cは2次分枝以下造影されたものとした。その結果1. LC症例の Hepatogram 分類は ICGR₁₅ 値と有意の関連を示した。2. LC症例において Hepatogram の分類は予後判定の指標となる。

3) 消化器外科領域における安定同位元素の応用

坂本昭雄 (生化学研究室)

非放射性を特徴とする安定同位元素で標識された種々の化合物を用いて消化器外科患者の蛋白代謝, 消化吸収・肝機能を検討した。蛋白代謝は加齢と共に有意に低下し, 肝硬変患者では蛋白合成速度と肝機能とに相関を認めた。脾切除術後症例では脾外分泌の著明な低下を認めた。肝硬変患者では肝ミトコンドリア, ureacycle, ミクロゾームの機能のうち, 正常肝に比べ urea cycle, ミクロゾーム機能の著明な障害を認めた。

4) 乳癌に対する最近の診断と治療

唐司則之 (病理研究室)

教室における乳癌に対する最近の診断法では画像診断法として1978年より超音波断層法が, 1986年より CT, DSA が用いられている。病理診断法として1979年以降, 穿刺生検が多く行われるようになってきている。治療では1978年以降は縮小手術が増加傾向にあり, 適応可能範